

## 特 集

# 価値づけと遂行性： 制度経済学のプラグマティックな展開

本特集は、コンヴァンション経済学やアクターネットワーク理論を援用しながら、経済、とりわけ、市場やそこで交換される財・サービスの価値づけを分析するための枠組みを理論的、経験的研究を通じて探るものである。

認知資本主義論が示唆するように、現代資本主義の一つの特徴として、生産と消費、労働と生活、対象としての経済とその観察者によって生み出される学術的知識といったものの中で築かれてきた境界が曖昧になっていることがある。それらはますます相互依存し、互いに影響を及ぼし合うようになってきているように見える。

たとえば、イノベーションは企業の垣根を超えて、社会ネットワークの中で流通する知識に依存するようになってきている。消費者もまた、多様な形で、生産の過程あるいは財の質の構築に参加する機会を増やしている。生産者と消費者の垣根の溶解に関しては、UberやAirbnbのような「シェアリングエコノミー」を想起しても良いだろう。他方で、市場で交換される財の価値が、機能性のみならず多様な観点から評価されるようになるにつれ、フェアトレードのように、社会的公正や一般利益といった見地から判断されるところの、ある財の生産・流通・交換の過程の質が、当該の財の価値を構成すると同時に、市場交換を通じて社会そのものを変化させる作用をも生み出し得る。

こうした現代資本主義に固有の、新しい特徴を持った市場や価値づけの仕組みを考察するために、新たな理論的な枠組みが模索されなくてはならない。これは執筆者に共通の認識となっている。世界的にみて、この10年ほどで価値づけ研究valuation studiesという分野が急速に確立しつつあるが、この展開に少なからず影響を及ぼしているものとして、コンヴァンション経済学とアクターネットワーク理論がある。

コンヴァンション経済学とアクターネットワーク理論の関係を簡潔に示すことは容易ではないが、いずれも1980年代以降のフランスの人文社会科学の刷新を担ってきた議論であり、社会科学の「プラグマティックな展開」と呼ばれる潮流に位置付けられるものである。たとえばコンヴァンション経済学では、(制度をめぐる議論がいずれか一方の痕跡をとどめる)方法論的個人主義にもホーリズムにも単純に還元されないような、「複雑なプラグマティズムの状況主義」が採用されているとされる (Diaz-Bone 2011)。そこでは、「分析単位はもはや、個

人や社会集団ではなく、物理的、認知的システム（個人と、彼らが用いる人工物とから構成されている）」となる（ベッシー・ショーヴァン 2018, p.30）。こうした立場は、アクターネットワーク理論においてもおよそ共有されていると考えて良い。

そして、この共通の計算空間として機能し、思考と行為の規則性を担保する仕組みは、不確実性下における実践を通じて構築されるものである。コンヴァンション経済学においては、「知識、価値、そして認知的構造は、実践的に獲得され使用されるのであって、それらは社会的実践において恒常的にテストされる。それらがこうした実践にとって有用である限りにおいて、それらは真実」（Diaz-Bone 2011, p.52）であると考えるのである。

本特集は、これら二つの理論を参照しながら、市場、価値づけ、遂行性といったテーマを扱うための理論的な枠組みを探る第一歩となるとともに、その応用可能性の一端を経験的研究を通じて示すことを目指し、企画した。寄稿論文のうち、山本論文とベッシー & シャトーレイノーの須田・立見による翻訳は前者に、立見論文と北川論文は後者に含まれる。所収の順に従い、内容に少し触れておこう。

立見論文は、コンヴァンション経済学の議論を用いて、「豊穡化の経済」における財の価値づけの過程について、実際の製品開発プロジェクトを基に考察している。ベッシーとシャトーレイノーの「モノの感覚（手がかり）」論において示された4つのテストを念頭に置きながら、表象、モノの知覚の調和の中で財の価値づけがなされる過程を描き出そうとしている。

北川論文は、主体変容そのもの目的とするサービスを事例に、顧客との関係においてサービス・プロセスにおける主体変容をどのように認識させ、評価させるかを、いわばプラグマティックな価値の形成の過程を明らかにしている。この事例において、主体変容は、「諸装置」によって主体自身に認識され、プロジェクト・チームの中で合意される「物語」によって集合的に価値づけられている。

山本論文は、アクターネットワーク理論の代表的研究者であるM. カロンおよびその影響を受けた研究者たちが用いる「経済学の行為遂行性」という概念について、カロンらのいう市場的配置の議論との関係にも着目しながら、それがいかなる意義をもつのかを検討している。

ベッシー & シャトーレイノーの論文は、1995年に出版された『専門家と贋作者』の改訂版（2014年）のあとがきを訳出したものである。このなかで彼らは「モノの感覚（手がかり）prise」論を展開し、フランス人文社会科学における「プラグマティックな転換」に貢献をした。その重要論考の今日的な意義を扱ったものである。

小さな一歩ではあるが、本特集号が、この分野において今後議論をさらに深めていくためのきっかけの一つを提供できれば幸いである。

執筆者一同

立見淳哉・山本泰三・須田文明・北川亘太

**文献**

ベッシー, C.・ショーヴァン, P. M. 著, 立見淳哉・須田文明訳 (2018) : 市場的媒介者の権力, 『季刊経済研究』 38(1-2) : 19-50.

Diaz-Bone, R. (2011) : The methodological standpoint of the “économie des conventions”.  
*Historical Social Research*, 36(4): 43-63.